露都雑記

―――― 映画文学人生論

二葉亭四迷 (1864-1909)
『露都雑記』1909 「東京朝日」
『入露記』1908 「東京朝日」
『浮雲』第一篇 1887「金港堂」
翻訳『あひゞき』1888 「国民の友」
翻訳『うき草』（1908) 「金尾文淵堂）

ヤポーシカが通る

二葉亭四迷の『露都雑記』は、朝日新聞の露西亜特派員として露都を訪れたときの報告文。明治四十二年三月十七、十八日、『東京朝日』に発表された。

体調をくずしていたせいか、文章にあまり迫力が感じられないが、見方によっては、もともと四迷はそういう性格なので、持ち味を発揮した文章ともいえる。

人の面（かほ）をぢろ／／視て「支那人が通る」は無礼に相違ないが、まづ悪口の部には入れない。が中には図星日本人と看て取て、ヤポーシカが通るといふ。ヤポーシカとは我国の露助と同格で日本人の賤称だ。複数だとヤポーシキとなる。之をヤポンスキイと間違へて単に日本人の事だと思ふ人が露語を知らぬ人に多いやうだが、ヤポンスキイとは日本のといふ形容詞で日本人の事ではない。日本人の事は露語でヤポーネツといふのだ。

明治四十二年といえば。日露戦争が終わって四年後である。東京の吉原あたりで大道演説を聞いて興奮した野蛮な日本人が、

「ニポン、カタ、
ラシヤ、マキタ」

と、歌っていたという。そんな通信文の記事が

露都雑記

―――― 映画文学人生論

ロシアの新聞に掲載されたとも紹介している。

「かういふ通信人のかういふ通信文を平気で掲載する真意は僕も知らんが、しかしかういふ通信が保守臭味の露国人に一般に歓迎せらるゝのは事実である。需用の存る所供給之に従ふ」。

これでは四迷が露都の路上でヤポーシカと賤称されたのも不思議ではない。

四迷は医師から肺炎及び肺結核という診断を受け、三月十八日にペテルブルグの病院に入院してから帰国の途につき、五月十日、ベンガル湾洋上で死んだ。愛国者というよりも浮雲のようなルーヂンやオブローモフの最後という印象を受ける。

ロシア人は、江戸時代には露助ではなく、赤蝦夷と呼ばれた。天明初年（1781)ごろ、工藤兵助が『赤蝦夷風説考』を著し、寛政三年（1791年）には、林子平が『海国兵談』で赤蝦夷にたいして国防の必要を説いたが、幕閣以外の者が幕政に容喙するのはご法度であるとして発禁処分になった。

四迷には工藤平助や林子平のような危機感がなかった。彼が死んでから、三十五年後の昭和四十五年八月九日、ロシアは日本に宣戦布告し、シベリアから満州へなだれこんだ。赤蝦夷がヤポーシカにたいして日露戦争の仇をとったことになる。

「ラシア、カタ
ニポン、マキタ」

親も無し　妻無し子無し版木無し　金も無けれど死にたくも無し　六無斎